

貝類資源調査結果

貝類資源の変化を把握するために1986年（昭和61年）から漁場内の定点において貝類の分布密度調査を偶数月に実施しています。

貝類資源調査によると、2024年は広範囲で低密度に分布し、青潮による大きな減耗も見られませんでした（図1）。

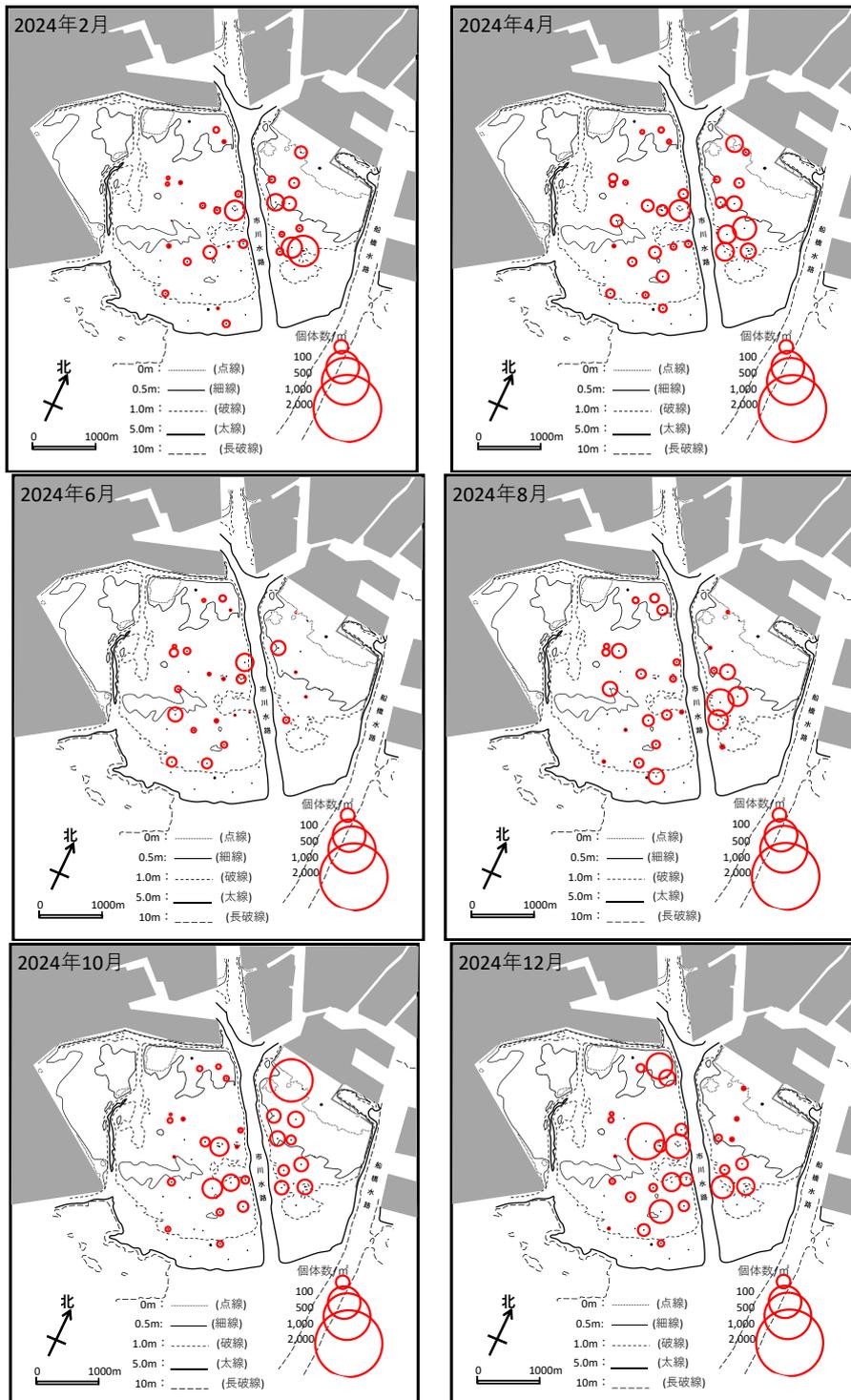


図1 貝類資源調査によるアサリ分布密度

貝類資源調査による最近5年間のアサリ分布密度の推移をみると、殻長16 mm以下の小型個体が主体で、ほとんど16 mm以上に成長することなく、減耗しています(図2)。2002年以降の長期的な推移をみると、近年は著しく減少していること、殻長16 mm以上の個体がほとんど見られないことが特徴です(図3)。

一方、ホンビノスは、2020年以降、1桁台～21個/m²と低調に推移していましたが、2024年はやや増加しました(64個/m²)。ただし、依然低密度であり、漁場は三番瀬外が主に利用されています(図4)。

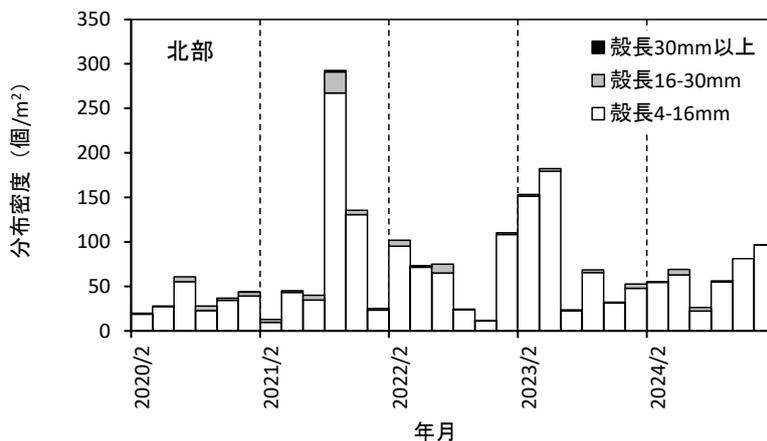


図2 最近5年間のアサリ分布密度の推移

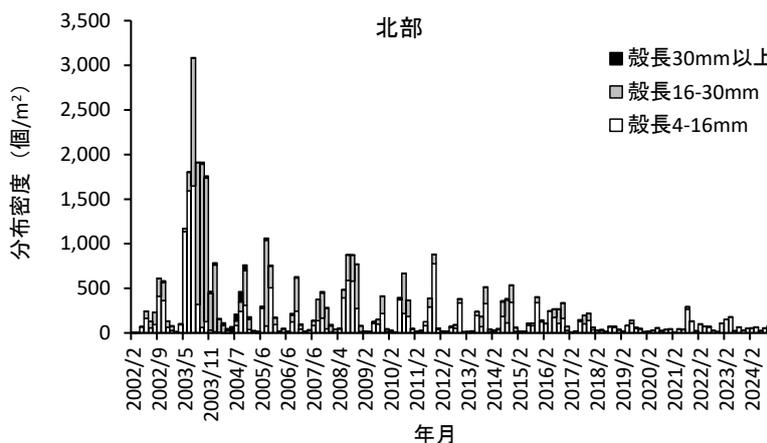


図3 2002年以降のアサリ分布密度の推移

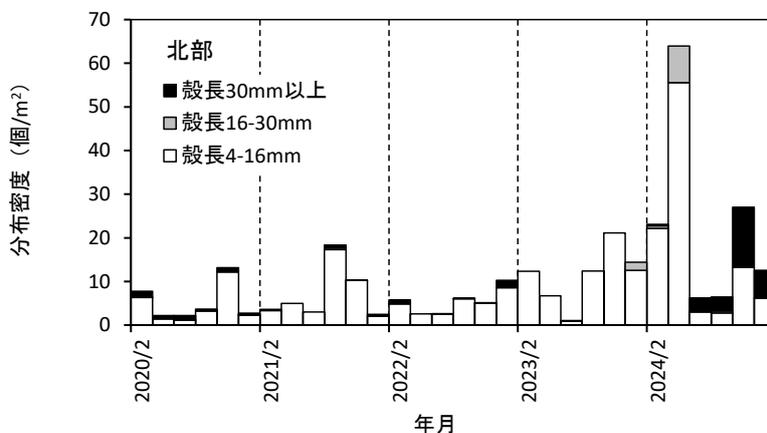


図4 最近5年間のホンビノスガイ分布密度の推移

1～12月の最大値を1として、各年のアサリの相対分布密度の季節変化をみると、2014年までは秋冬季(12月)に著しく減少しているのに対し、2015年頃からはその傾向はみられなくなっており、北部海域でのアサリの減耗要因が変化したことが考えられます(図5)。

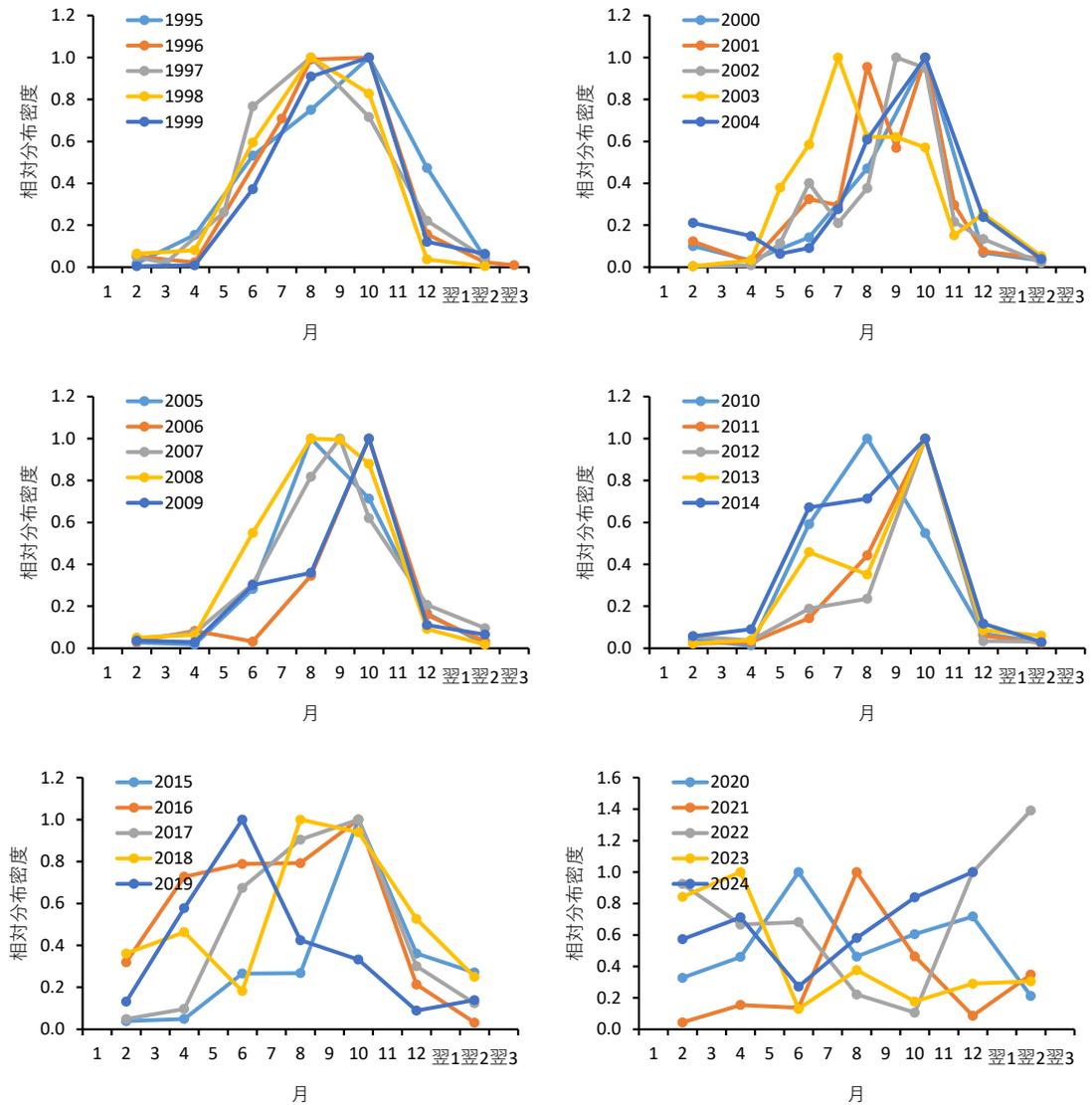


図5 アサリ相対分布密度の季節変化

【他海域との比較】

最近 5 年間のアサリ分布密度を他海域と比較すると、北部は密度が低い、殻長 16 mm 以上の個体が出現しない（減耗している）ことがわかります（図 6）。

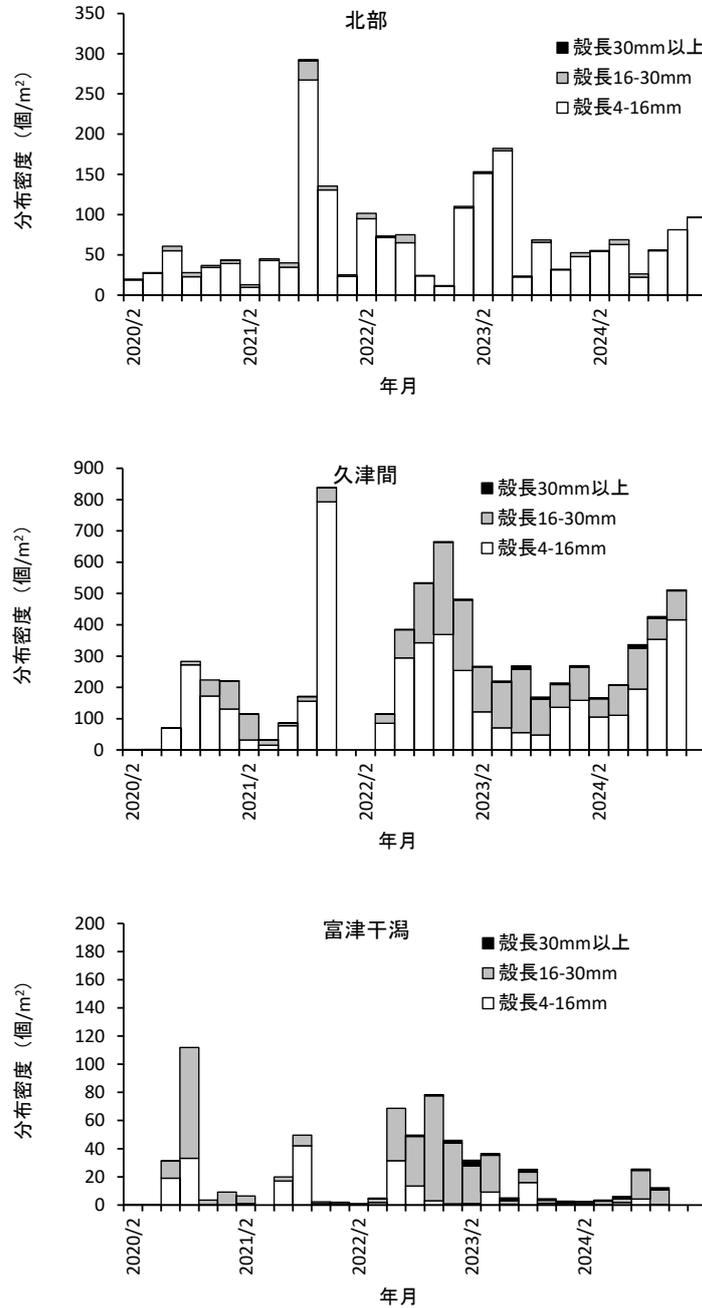


図6 アサリ相対分布密度の季節変化

【環境との関係】

各海域における栄養塩（DIN,DIP）, クロロフィル a とアサリ肥満度を比較すると、栄養塩（特にDIP）が減少し、9、10月のクロロフィルaが大きく減少していますが、他海域に比較すると高い水準にあり、餌料不足のみによる減耗は考えづらいと思われます（図7）。

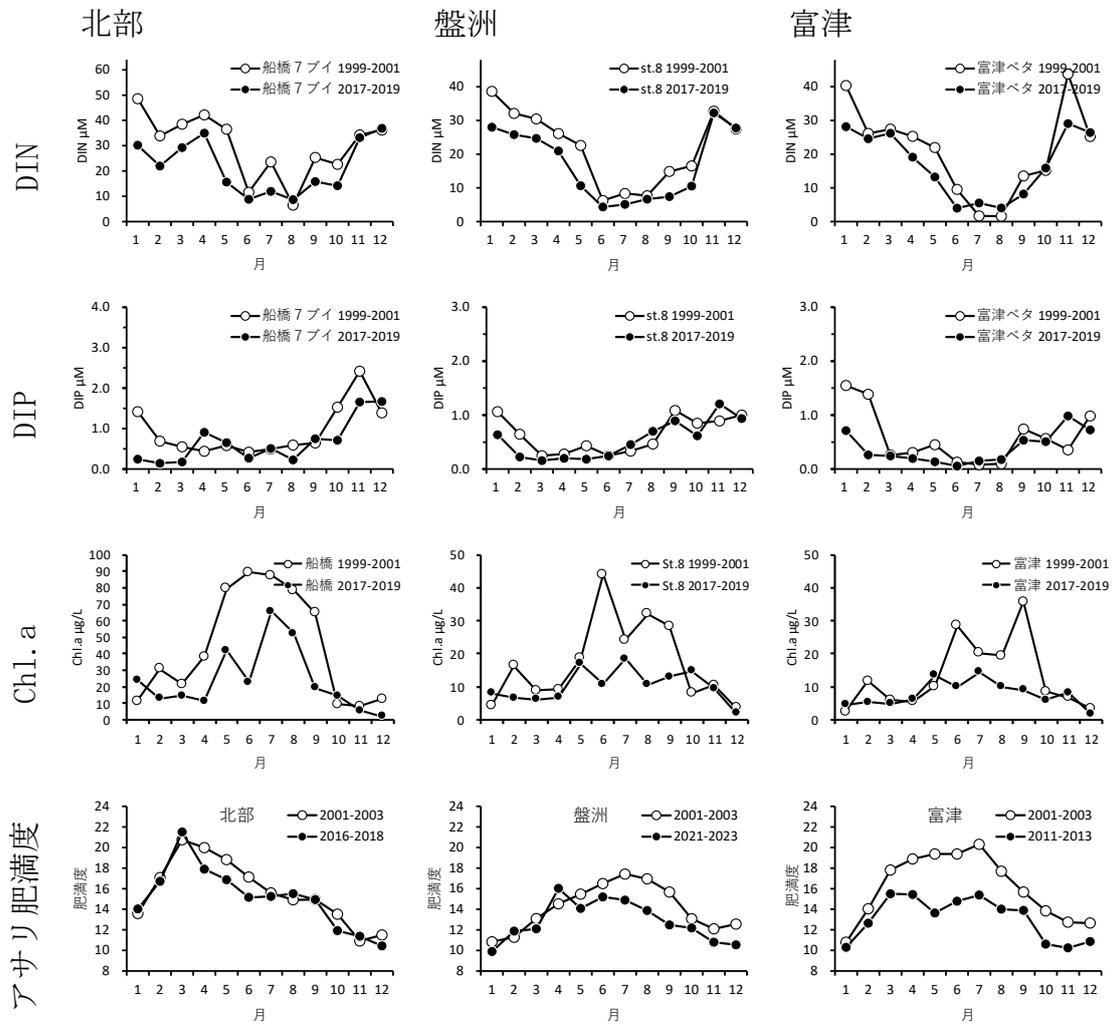


図7 栄養塩（DIN,DIP）、クロロフィル a とアサリ肥満度の関係